

## 学生担当教官室で学んだ教育のあり方

－筑波大学での29年間を振り返って－

萩原武久

### 1. はじめに

大阪教育大学から本学に配置換えになったのが、昭和54年1月1日なので、厳密には筑波大学での教員生活は29年3ヶ月になる。

思い起こせば、昭和53年の秋に当時の副学長であった大石三四郎先生から突然電話があり筑波大学へ来ないかとのお誘いを受けた。話を聞いているうちに、その時期が1月であること、そして何よりも大阪教育大学で多くのことが軌道に乗り始めていた時なので大いに悩むこととなった。

特に学期途中での転出は、学生にも大学にとっても何とも迷惑な話だったと思う。

案の定、体育科の会議は紛糾を重ね、出す、出さないと当時の先生方には多くの時間を割いて検討をしていただいた結果、やっと許可がおり筑波大学に着任することができた。

### 2. 筑波大学での初仕事

筑波へ着任した1月は学期の途中なので授業を担当することはなかったが、学生担当教官室員は命じられていたので、第一学群にあった学生担当教官室で仕事の第一歩が始まった。筑波大学特有のクラス制度や、学生担当教官制度が何なのかも理解しないうちに、今でも脳裏からはなれることのない悲しい出来事に遭遇した。

着任早々の2月初旬の寒い日だった。一の矢学生宿舎で学生が自殺を図ったとの連絡が

学担室に入った。私に課せられた仕事は、現場を確認して学担室に状況を報告することだった。筑波に来て間もない人間が、一の矢宿舎がどこにあるのかも、指定された棟や部屋がどこなのかも、まったく分からないまま何とか現場にたどり着いたのだが、その光景を目の当たりにして、私の全ては凍りついてしまった。

次に、検視を必要とするので当時の社会医学系の教授を探して、現場に同行せよというものだった。今でこそ、教員の名前も専門もそれなりに分かるけれども、当時の私には、どこから何をはじめたらよいのかというほど、何にもわからない状況だったが、何とか連絡がとれ現場に来てもらうことができた。現場で全てが一段落したころ、ご両親が駆けつけてくる。ご両親の落胆と深い悲しみに、言葉もかけられない虚しさど、何もすることができない無力さに、ただただ涙するしかなかった。

この一件を機に、筑波大学ってこんなことが起きる大学なのかという驚きと、学担室の役割を何となく理解することができた。と同時に、我々教員にできることは、筑波大学に入学してきた学生たちが、親御さんを悲しませるようなことをしないで学生生活を全うするよう、強力にサポート・支援をしていくことが使命だと心に決め、この経験を大学教員としての仕事の原点として位置づけていくことにした。

注：第一学群，学生担当教官制度，学生担

当教官室、学生担当教官室員は当時の名称である。

### 3. 先進的な学生担当教官制度

「学園祭紛争」。今では、本学にもそんな出来事があったのかということさえ、知らない人たちの方が多いかも知れない。この一件により、学生担当教官室は昼夜を問わず、数年間にわたり学生対応を迫られることになる。

この紛争は、学園祭の企画をめぐり一部学生と大学の対立から端を発したものである。本学の学生規則では、政治的、宗教的活動が禁止されているのだが、学園祭の企画の中に、政治的活動と判断されるものがあり、その企画をやらせろという学生と、許可しないという大学が真っ向から衝突するという、不幸な出来事であった。

これらは、副学長軟禁事件、学園祭中止、機動隊の導入、授業妨害、学生の処分と続き、一連の動きはなかなか鎮静化することはなかった。

思い起こせば、学生が大きなたて看板を出したといえ、夜も明けぬ内に学生部の事務の人たちと撤去に行ったこと、学生が大量のビラを配布すれば、それに反論する配布文書を夜を徹して作成し、学生が登校する時には一般学生の手へ渡すようにしたこと等、苦しい辛い思いが甦る。その中で、何よりも苦痛だったのは、このような大学側の行動に対して、活動をしている学生たちは、数時間後には必ず学担室に押しかけてきて激しいやり取りが始まるのである。この騒動も、数年の歳月と裁判という形で沈静化していくのだが、この活動に加わった学生数名が停学と退学処分になったが、胸のつかえや後味の悪さは、今でも心の隅に残っている。

私の昭和54年から6年間の学生担当教官室員の生活は、ほぼこの対応に明け暮れたといっても過言ではない。この「学園祭紛争」に関わった当時の学生担当教員は私が最後の一人

人となったが、事務員には当時苦勞を共にした方々がまだ多く残っている。この一件も、事務員の人たちの協力なくして終焉はなかった。一人ひとり名前を挙げるわけにはいかないが、昼夜をたがわず学生の対応に付き合っていたいただいた事務員の方々には、今でも感謝の気持ちで一杯である。

注：学生担当教官室、学生担当教官室員は当時の名称である。

### 4. 学生担当教官室長時代

6年間の学担室員の経験から、いつかは室長をやることもあるか位のことは想定しなかつたが、その時期は以外にも早くやってきた。

平成7年の年度末、学生担当教官室と学生部との連携がうまくいっていないので、その関係を修復し、正常化するというのが私への注文であった。

私が学担室員をしている時は、学生部の職員とは苦樂を共有できる仲間であったものが、その関係が崩れてしまっていることは信じがたいことであった。

10年ぶりに戻った学担室、部屋も室員の先生方の雰囲気も以前の活気も明るさも憫然とすることばかりで、暗いスタートになった。

学担室と学生部の齟齬を招いている原因は、ここ数年の一人の室員の勝手な言動によるものであり、この室員のコントロールができない限り、両者の修復はないと考えられたのだが、そこから苦痛の始まりだった。若かりし頃の学生運動家を自認するその室員と、毎週木曜日に行われる定例の室員会議では、延々とバトルが繰り返される。私も、木曜日が近づくと体調がおかしくなるようなことも度々だったが、多くの人の協力を得て秋口には何とか正常に近い関係を取り戻すところまでこぎつけることができた。

ここで忘れることができないのは、当時の

山根明学生部長の存在である。山根部長の全面的な理解と協力があって、学生支援の両輪である学担室と学生部の関係を本来の姿に戻すことができた。

平成7年から4年間、学生担当教官室長を勤めさせていただいたが、室員時代を含めると10年という長い期間になる。その間、全代会、体育会、学園祭実行委員会、宿舎際実行委員会の学生をはじめ、多くの教員と特に学生部の職員の方々にお付き合いをいただいた。学生からも、学生部を中心とする事務員の皆さんからも多くのことを学ばせてもらった。学生や教員の裏の人生も多く見た4年間だが、他大学に類を見ない先取的なこの学生担当教官制度は、学生支援の最先端をいくもので本学の誇る制度の一つではなかったかと思っている。学担室で得た全ての事象を教育の根幹にすえることができたことは、私にとっては、何ものにも変えがたい大きな「財産」の一つであるが、大学にとってもこの制度が財産であり続けて欲しいと願っている。

注：学生部、学生担当教官室、学生担当教官室長は当時の名称である。

## 5. 蹴球部の監督

明治29年(1896年)創部の伝統ある蹴球部の監督を2度努めることができた。この間、本当に多くの優秀なプレーヤー、学生たちに巡り会えてこんな幸せなことはなかった。

蹴球部での思い出は尽きないが、そのうちの一つは、平成12年(2000年)10月21日の関東大学サッカーリーグ戦である。この日の対戦相手は中央大学である。この試合に勝てば最終節の1試合を残して2連覇が決まるという大事な一戦である。

いつもは陽気で、ここまで全勝で進んできたチームとは思えない重苦しい雰囲気グミがミーティングルームに漂っていた。この空気を打破するのに何をを使うか、迷った拳句に宝刀を抜いた。

「今日は私の誕生日。何もいらぬ。勝て。」この一言で選手は一気に盛り上がりを見せ、先程までの緊張感をときほぐし、試合開始から中央大学を圧倒し、前半で勝負を決するような展開を見せ、4対1で完勝し2連覇を成し遂げた。

試合終了後、ピッチの中の選手とスタンドにいる180名を超える学生たちによる「Happy Birthday」の大合唱。学生たちの粋な計らいと彼らの心意気に、今、思い出しても熱いものがこみ上げてくる出来事であった。

もう一つは、何と云っても今年度、平成19年度のリーグ戦である。ここ数年の低迷が今年は顕著に現れ、開幕から最下位が続き2部降格かといわれる危機的状況が続いていた。打開策を求めたコーチ諸君は、私にグラウンドにでて指導することを求めてきた。最終的には彼らの意向を汲んで、4月の下旬から覚悟を決めてチームに同行することにした。

私がチームに加わったからといって、一気に得点力が向上するわけでも、勝てるという特効薬があるわけでもない。しかし、徐々に手堅い戦いはできてきたものの、なかなか勝利に結びつかず、順位を上げることもできず、最終節11月24日を迎えることになる。対戦相手は何かと因縁のある中央大学で、この試合に勝ち、次の試合で青山学院大学が引分けか負けなければ2部降格が決まるという厳しい状況の試合で、1対1で同点のままロスタイムに突入。このロスタイムで奇跡のゴールを決め、第2試合で青山学院大学が敗れたことにより順位を10位に上げ、何とか81年の伝統をもつ関東大学サッカーリーグの2部降格を免れることができた。ここには、歴史の力、OBやこのチームに思い入れをもつ全ての人たちからの、目に見えぬ力を与えてもらったものと感謝の気持ちと安堵で一杯である。筑波大学蹴球部の歴史は、優勝という数々の栄光もさることながら、2部降格という不幸な時代と人を作らなかつたことも、勝

つことと同様の価値を持っているといえるだろう。

サッカー部に限らず、本学の各運動部の歴史は長く、それ故にいたるところでそのすごさや人とのつながりを体験しているのは私一人ではないと思う。

次の文章は、平成13年8月に本学蹴球部が100周年事業として行った英国遠征の時の“*You'll Never Walk Alone*”と題した私の同行記であるが、今をときめくプレミアリーグのマンチェスター・ユナイテッドが全面的に協力してくれたのは、チームと大学の歴史が後ろ楯にありできたもので、その歴史の重みとすごさを紹介したい。

『茗溪サッカー100周年記念行事の積み残しの事業である、英国遠征がやっと実現した。2つのグループに分かれ、総勢約90名、後発グループ59名に同行した。』

先ず今回の遠征に参加する目的から話さなければならぬ。1つは、近年隆盛を誇るプレミアリーグが、10年前に見たサッカーとどのように変化しているのかを自分の目で、自分の感覚で確認すること。もう1つは、この3年間、監督をしていてミーティング等で度々口にし、180人の総力で戦い筑波の強さを全ての所で見せつけろと強調してきた。その甲斐あって、この2年間はそれなりの満足のいく成績だったと思うが、心の隅にはいつも埋め尽くせない空白があった。それは180人全員で戦おうと言っておきながら、全員とグラウンドでサッカーができなかったことへの後ろめたさと申し訳なさが常に付きまとっていたからである。それは、Aチームの選手たちと行う個人面接の時にも、何人かの選手は必ずと言っていい程、「時間を作って自分達以外の選手ともサッカーをやって下さい」という要望をしてきたが、残念ながらその要望には殆ど応えることができなかった。しかし、その反面では常に仲間のことを思いやる心優しい選手たちと共に、サッカーができた

ことは感動の何ものでもなかった。そんなこともあって、今回の英国遠征には多少の罪滅ぼしの意味合いも含めて同行することにした。

12時間を要してHeathrowへ到着、休む間もなく一路バスで目的地のManchesterへ。車窓からの風景は長旅の疲れを癒してくれる。4、5時間だろうか、マンチェスター大学の学生寄宿舍Alan Hallへ到着。以前にも幾つかの大学の寄宿舍に宿泊した経験もあるので、大方の予想はしていたが、あらためて環境の良さに驚かされる。日本では、筑波大学の学生宿舎も質量ともにそれなりの評価があるのに、ここに至っては、その比較の対象にもならない程の凄さである。

その驚きは、翌朝トレーニングを行うグラウンドに行くと更に大きなものになる。一面に広がる緑の芝生、その中央に位置するクラブハウス。多くの学生諸君は、この光景を見ただけでも、英国に来てよかったと思ったのではないだろうか。

個々の面々が、徐々にカルチャーショックを感じていたと思うが、その、ショックはリバプールでのプレミアリーグ開幕戦、リバプール対ウエストハムの行われたアンフィールド・スタジアムでより確かなものになる。

試合開始直前、4万5000人を超える大サポーターが、場内アナウンスを機に全員が起立し一瞬にしてスタジアムが静寂に包まれた。今までの喧騒がまるで嘘のように静かになる訳を理解するのに長い時間は必要なかった。学生諸君も目にしたと思うが、スタジアム入口の記念碑に花を手向け、静かに手を合わす多くの人々の姿を。そして、入口のモニュメントに描かれた“*You'll Never Walk Alone*”の文字を。話は1989年に遡る。ヒルズボロ・スタジアムでのFAカップ準決勝、対ノッティンガムフォレスト戦でフェンスが崩落、95人のリバプールサポーターが圧死したのである。

この時には街中が悲しみに包まれ、リバプールにあるリバプール、エバートンの両チームのサポーターが腕をくみ、死者を悼んで街を静かに歩いたと言う。リバプールの応援歌のタイトルは「君は一人じゃない You'll Never Walk Alone」である。悲劇の後、人々は愛する者を失った悲しみを分かち合い、励まし合いながら生きてきた。

リバプールの人々は、コミュニティーを尊重し、同郷の仲間を大切に、喜びも悲しみも分かち合う気質が特徴だという。このような背景があり、選手もサポーターも敬虔な祈りを捧げたのである。この光景を目にして、スポーツ文化だとか、サッカーは文化だというような表現は軽々しく用いてはいけなと思うと同時に、サッカーを通して人の心の一つに結び付け、喜びも悲しみも共に共有できるこの国の人たちを限りなく羨ましく思ったものである。

試合は、サッカーの原点である「上手い」、「速い」、「強い」の三拍子が90分間途切れることなく展開され、観る者を飽きさせるようなことは全くない。結果は、ワンダー・オーエンの活躍もあり2対1でリバプールが勝利を収め、リバプールのサポーターに早変わりした学生たちも満足したようであった。

さらに驚くべきことは、連日行われる学生たちの交流試合で、日本では余り見ることのない光景に遭遇する。それは審判の体制である。日本では、ルールも理解していないような小学校低学年の子供たちの試合でも、大人と同じレベルの体制が敷かれ、判定も同じような感覚で行われている。ところが、今回行われたゲームは主審の一人体制である。副審がいてもその役割を果たす訳でもなく、主審も副審の判定に気を使うこともない。それは、英国ではアマチュアの試合は、基本的には全てが主審の一人体制で行われるようである。その目的や背景には幾つかの理由があるようであるが、一番の理由は、主審の権威、

権限をプレーヤーに認識させること、言い換えると、ゲームの中で主審が選手を教育していきながらゲームをコントロールするという形式からきている。従って、ゲーム中の主審はプレーヤーと実に話をよくしながら、笛を吹いていく。また、判定の説明やカードの提示に主審はプレーヤーに歩み寄ることはなく、毅然とした態度でプレーヤーを自分の所まで呼び寄せ、判定を伝える姿に威厳を感じるのである。このような光景は、プレミアリーグでも度々見られる光景でもあった。これらのことは、単にサッカーの歴史や国の違いだけの問題にするのではなく、その背景に隠されている真理を追求し課題を探り出すことに意義がある。

今回の遠征もピッチだけの戦いではなく、サッカーの母国から何を学ぶのかも、学生にとっては大きな目的ではなかっただろうか。

100年事業の一環としての英国遠征も、若干の心配事はあったにせよ成功裡に終えられたと思っている。参加者、そしてご支援してくださった多くの方々との喜びを分かち合いたい。

世間は狭いもので、至るところで筑波大学とサッカーの凄さを思い知らされた。リバプールのアンフィールド・スタジアムでは偶然にもコーチの勉強にきていたソウル大学OBで、元韓国代表選手のファンボ・カンさんにも会うことができた。ちなみに彼は、学生時代に筑波との交流で訪筑している人物である。

最後に、この交流の成果が問われるのはこれからである。一人ひとりが感じたこと、思ったことを各人の人生の中にどう生かしていくのか、更には、その力を筑波大学蹴球部へ、あるいは社会へどう還元していくかにかかっている。学生諸君の今後に大いに期待したい。サッカーを愛する人たちと、筑波大学蹴球部の皆に、「You'll Never Walk Alone」の言葉を贈ろう。』

この遠征では実に多くの人たちにお世話になった。特に、マンチェスター・ユナイテッドの往年の名選手で、元イングランド代表、現在はマンチェスター・Uの若手の育成に力を注いでいるビル・フォークさんからは、1958年のミュンヘンでの飛行機事故で、イングランド代表選手8人が亡くなったときの生存者としての貴重な話を聞くことができた。前述のような筑波大学と筑波大学蹴球部の凄さをサッカー発祥の地で体験することができたわけだが、このような体験は国内外を問わず、運動部に関わりをもっている先生方は至るところで感じていることだと思う。筑波大学の特色の一つが「体育」だとよく言われるが、その中での「運動部」の活動と成果について、教員も学生ももっと認識と評価を確認し、誇りと生き甲斐をもって活動を行うべきである。

## 6. 体育センター長として

平成12年から6年間、体育センター長を勤めさせていただいたが、大きな役割は二点に集約できると思う。

第一は、共通科目「体育」を、受講学生と他の専門領域の教員にどう理解を深めてもらうか、そしてもう一つは膨大な数の施設の改修、修理を行いながら、利用者に開放し満足してもらうためにどうするのかということである。それらの成果として「体育センター」の意義が理解され、センターとしての地位を確立し評価されるものと考えた。

先ず「体育」の授業だが、新入学生には4月の最初に講堂で「新たな体育の始まりに」と題して講義をしていたが、これは今後の体育への取り組み方だけでなく、スポーツを通して「人間力」を高めて欲しいこと、さらに、親元を離れひとりで生活を始めるに当たっての要望や、注意と同時に、4年間の大学生活を大過なく過ごすようにと、親心を代弁しての講義は新入生には効果的であったと思ってい

る。

本学の共通科目「体育」は、開学以来4年間必修で行われてきたが、大綱化以降は2年間必修で、後の2年間は部局で決定するという変則的な形になった。現在も、2年以降の「体育」の単位を専門科目に移行したいという学類は増えているようであるが、簡単に体育の単位を減らすのではなく、体育のもつ意義や効果についてもっと慎重に判断をしてほしいと願っている。

私は、本学の体育のコンセプトは、「スポーツ力」を通して「人間力」の育成、向上にあると考えている。

「スポーツ力」とは私の造語だが、スポーツや体育が包含する教育的効果や効用をさしている。スポーツや体育は、単に身体を動かし汗をかき、勝敗を決するだけの営みではない。そこには、人としてよりよく生きるための幾つものキーワードが内包されている。その、体育・スポーツのもつキーワードの獲得こそが、「人間力」の向上につながるものである。

「人間力」とは、「人としてよりよく生きるための総合力」のことである。よりよく生きるとは、時代にふさわしい品性と知性を備え、何事にも最善を尽くし、自立をした個人として社会に参画していることを意味している。それでは「スポーツ力」の中の具体的なキーワードにはどのようなものがあるのかというと、「身体力」「社会力」「コミュニケーション力」「体験力」などが挙げられる。

「身体力」は、Activeな身体とActiveな精神(こころ)をさし、「行動力」あるいは「身体的教養」と置き換えてもよく、身体を動かすことをいとわないうことや、行動的で洗練された身体と精神(こころ)を有していることをいう。身体力は常に精神(こころ)と表裏一体をなしているもので、身体だけ、精神(こころ)だけと分離し考えることはできない。運動は、神経、脳、筋肉等の五感を総動員し自ら

の身体を慈しみながら行う崇高な行為である。大学人として「知」を生かすためにも幅広い人間性と見識が必要である。その基盤になるのが体力の充実である。

次の「社会力」は、自らを生かし大学と社会に参画し運営する力をさしている。人は社会の中で、人との関わりで生きていかなければならない。スポーツは、個人、集団、自然を相手にするものであれ、他者(用具、器具、施設等も含む)に対する愛着、関心、相互信頼等がなければスポーツとして成立しない。

「コミュニケーション力」は、単に自分の考えを相手に伝える力のことではなく、「相手の話を聞く力」や「洞察力」を含めたものであり、「人間関係を構築する力および能力」であるといえる。この人間関係がうまくいくことにより、筑波大学としての一体感や共有感も生まれてくる筈である。

最後の「体験力」とは、スポーツを通して日常では体験することのできない、痛みや怖さ、失敗や挫折、勝利と栄光といった「小人生」とでも言うべきさまざまなことが体験できる。また、失敗や恐怖に対してそれらを克服するための「挑戦」や、失敗や敗北を成功と勝利に変える挑戦の「過程」での努力や訓練が、人を大きく成長させている。

実践を通して人を育てる「スポーツ力」を持つ体育・スポーツは、この科目にしかできない特殊性をもっている。専門領域を生かすためにも、知を発揮するためにも「人間力」の向上は不可欠である。それらを獲得するためにも「スポーツ力」にも目を向けて欲しいものである。

第二は体育施設に関わる問題であるが、殆どの施設が開学当初の同じ時期に作られたものなので、改修や修理も全てに及んでいるところが大変な点である。

第一サッカー場は平成16年9月に人工芝に生まれ変わった。これは、原材料をモンド社と同社の日本代理店クリヤマ株式会社から寄

付を受け、工事費を大学が負担をする形で実現したものである。さらに大学の配慮でスタンドを設けることもできた。私の思惑では、それぞれの施設がこのような形式が取れないものかと第一サッカー場は先鞭をきったつもりだが、現実には厳しく他への波及ができなかったのは、残念至極であった。

今後は、これらの施設が「何のために」、「どのように使われ」、「どんな効果をあげるか、あげたか」を検証しながら、要、不要までを含めた計画を立てる時期がきている。とはいえ、計画途中であっても修理、改修は待つことなしにやってくる。

ここ数年の、体育合宿所やハンドボールコート、陸上競技場等の大型改修も偶然の産物ではなく、この実現の裏には体育センターの竹内猛主任専門職員の献身的な仕事があることを忘れてはならない。私も随所でサポートやアドバイスをいただき、大いに助けられた。記して、お礼を申し上げたい。

上記以外にも、先生方のアイデアと実行力によりいくつもの事業を展開することができたことにも、感謝の気持ちで一杯である。その一つが「学生による授業評価」の導入である。この授業評価は学内外からも高い評価を得るとともに、全学の「学生による授業評価」の口火をきるきっかけをつくった。さらに、授業評価の結果をもとにFD研修を開催するなど、体育センター独自の取り組みも始まった。

また、平成15年の「オリンピックの望郷」をはじめとする一連の五輪講座は、嵯峨寿准教授の発案により、体育センターの共通総合科目として始まった。スポーツ界の蒼々たるメンバーが顔をそろえたこの授業は、毎回受講学生の人気も高く、常に定員超過のため抽選で受講学生を決定するほどだった。

「オリンピックの望郷」へは、ジャック・ロゲIOC会長からメッセージが届けられ、受講生全員が会長宛に返事を書くというまさし

く生きた授業が展開されていた。

この五輪講座シリーズが契機となり、平成18年10月にはジャック・ロゲIOC会長をお迎えし、筑波大学名誉博士号の授与式典を行うことができたことも、喜びのひとつである。これらの五輪講座は、学生への人気講座だけではなく、私にとっても興味ある授業であり、特に外部講師の先生方との出会いは貴重な時間であったと同時に大きな財産となった。

最後に、体育センター長とは直接は関係ないが、「つくばユナイテッド」についても触れておきたい。

平成17年3月に設立したこの組織は、当時の高松薫学系長の依頼で、各運動部が個別で行っている地域貢献を、体育系全体で、あるいは大学としてやっているような形がとれる組織を作ることと、すでにできていたアクティブつくばとの線引きをすること、の二点を整備するために立ち上げたものである。

私自身は、そんなに大げさに構えるつもりもなく、100年を超える体育系の歴史のノウハウを、学内外に認知してもらうことが目的であり、大学が「市民大学」として地元「つくば市」や、「茨城県」から応援をもらえるような大学を目指しただけのことである。コーチング分野の教員を中心に立ち上げた組織だが、一日も早く体育系の教員全員と、部に所属する学生が加わり、体育系全体の総合力でやっている組織として定着するよう願って止まない。街を歩いている運動部の学生たちが、市民の皆さんから声を掛けられたり、応援をされるような光景を見たいと願うのは、私の夢物語であろうか。

## 7. おわりに

本学での生活が、人生の約半数を占めるほどの年月になった。本当に数え切れない程の学生、教員、事務員との出会いがあり、多くの方々にお世話になった。なんと感謝の気持

ちを表現したらよいのか分からない。

私の性格上、全てが真っ向勝負、変化球を投げることもままならず、誤解を受けることも、不快な思いをされた方もいらっしゃると思うのだが、心の底から「学生のため」「大学のため」にとの思いで発言し仕事をしてきた。ご迷惑をかけた諸兄には、お許しを乞う次第である。

体育センター長の6年間は、楽しいこと悲しいことも実に様々なことに遭遇したが、同僚を病気で亡くしたことや早期の退職勧告など、今でも胸の痛みを憶えるできごともあった。

体育センターも、施設をはじめ問題は山積しているが、個人の能力と組織力で一つ一つ問題を解決して行ってほしいと願っている。体育センターの行っている授業と事業は、人間不信のこんな時期だからこそ一層必要ではないかと考えている。

大学は、学生がキラキラと輝いてこそいい大学だといえるのではないだろうか。学生を、「学生」から「いい大人」に、そして「紳士」「淑女」に成長させるために、教員も事務員も本気で「教育」に携わってほしい。

「大学」の、そして「日本」の「未来」は彼らの手に委ねられているのだから！

筑波大学での29年間の思い出を綴らせていただいた。それぞれの時期の出来事がまさしく走馬灯のように駆け巡っている。喜びの涙も、悲しみや無念の涙も全てが昨日のような感じがしてならない。

筑波大学での29年間の教員生活を、大過なく定年まで勤めあげることができたのは多くの方々のお力添えと、ご理解の賜物である。衷心より御礼を申し上げたい。

最後に、学生諸君と、先生方、事務員の方々のご活躍ご多幸を、そして、体育センター、筑波大学の更なる発展を念じて、拙文としたい。